

t.yukan@mainichi.co.jp ファクス 03-3212-0279

特集ワイド

のけぞって見上げるほど東京スカイツリーに近い。地域の集会所を利用した教室は、東京の下町、墨田区の銭湯の横にあった。

「虫干しとはどんなことでしょうか」。先生の質問に首をひねる生徒は、この日4人。いずれも介護現場で働く外国人の女性だ。

日本語が必要な資格試験のために、地元の社会福祉法人やNPO(非営利組織)でつくる「すみだ日本語教育支援の会」が週に1度開く。活動は12年目に入り、これまで延べ約120人が学んだ。

花谷寿人の

体温計



生徒の隣に座り、マンツーマンで日本語を教えるのは、ボランティアだ。「てーねん・どすこい倶楽部」の面々は、その名の通り、定年後に地域の役に立ちたいというシニアたちである。

使う「梅毒」や「誤嚥」のよう難しい日本語も覚えた。

疋島さんは介護の仕事をいきいきと語る。「お年寄りの昔の話を聞くのが大好きです」

疋島さんから試験に受かった生徒

支援はめぐる

介護福祉士の疋島ヘルミニアさん(59)が日本人男性と結婚してフイリピンから来日したのは1988年だった。ヘルパーの資格を取るため、この教室に通い、介護に

たちは3年前、ボランティア団体「アポット・カマイ」を設立した。地域に恩返しをしようと、老人ホームなどでフイリピンの歌や踊りを披露している。

◇ 今年は国際化社会を強く意識することが多かった。

外国人労働者の受け入れを拡大する改正入管法が施行された。日本で開催されたラグビー・ワールドカップでは、海外出身選手が15人を占める日本代表チームに国民が「ワンチーム」で結束した。

来年は東京五輪・パラリンピック。疋島さんたちは海外から訪れる障害者の通訳や介助のボランティアをする。「アポット・カマイ」はタガログ語で「手を取り合っ

◇ 助け合う」という意味だ。

すみだ日本語教育支援の会で教える柳田恭子さんは生徒と関わるのが楽しくてたまらない様子だ。自分も介護される時が来るかもしれない。だからこう言ってくれたことが心底うれしかった。

「先生、大丈夫だから。私が見てあげる」

支援とは一方的なものではない。支えることは支えられることにつながる。教室に集う人たちはそれを知っている。(論説委員)